

第5回 安倍川総合土砂管理計画フォローアップ作業部会 議事メモ

- 日時：平成31年3月26日（火）10：00～12:00
- 場所：男女共同参画センター あざれあ 501会議室
- 議事内容

1. 平成30年度の取り組み状況及び土砂管理基準に関する検討について

- (1) 来年度の委員会への報告内容は、土砂管理指標・基準の現時点での評価結果となるのか。現行の土砂管理指標・基準については、これまでの経緯を含め時系列で評価結果を示す等の工夫が必要である。
- (2) 新たな指標・基準に移行するのであれば、まず現行の指標・基準をしっかりと評価することが必要である。
- (3) 新たな基準案については現時点では整理し切れていない部分も多く、当面は新旧2つの指標・基準で運用をしていく予定である。
- (4) 現行の基準である河床高のみの評価では、どこまでの変動なら許容できるかを検討することが難しいことから、作業部会では幅を持った基準を検討してきた。委員会では作業部会での土砂管理基準に関する内容について議論してもらい、指標・基準の変更や運用方法等の判断をしていただく。
- (5) 土砂管理指標による評価でNGとなった場合に、どれだけ確からしいNGなのかを把握しておく必要がある。
- (6) 作業部会には各分野の委員や関係機関が参加しているため、土砂管理基準と各分野での事業内容等との関連性・連携を図っていくことが重要である。
- (7) 土砂生産・流出領域の土砂管理指標を河床勾配としているが、支川でモニタリングが蓄積されれば将来的にこの指標の検証を行うことが理想である。例えば、5年毎にLP測量が実施されれば、崩壊土砂量、堆積土砂量、流出土砂量、河床高等の情報が把握できるため指標としての河床勾配の妥当性の評価等を行うことができる。
- (8) 例えば藁科川においてNGと評価された場合の意味合いと、その時の対応方法を検討する必要がある。支川からの流出土砂量が減少した場合でも、その他の支川からの流出土砂量が多い場合等、本川で確保されていれば、流砂系全体で見れば問題がない可能性もある。
- (9) 土砂生産・流出領域の土砂管理指標の妥当性について、河道内の年平均堆積土砂量と支川出口の河床高、河床勾配との相関を分析しているが、たとえば堆積土砂量が横ばいであること、河床高は上昇していることについてどのような現象が生じているのかなど、データの持つ意味合いを詳細に分析する必要がある。そうすることで、現在、モニタリングデータの少ない箇所に対しても、今後どのようなモニタリングがあると有効であるかが把握できる可能性がある。

- (10) モニタリング結果については、流砂系全体を見渡せるような評価書のように、俯瞰的に把握できるような整理をできないか。(宮崎海岸の事例など)
- (11) 河口テラスについて、土砂管理指標等は設定されていないが、河川と海岸の接続部であり重要な地点であるため、河口テラスにおける指標・基準が必要ではないか。
- (12) H25年の計画策定時と比較して、現在はALBやLP等の観測技術が発達し様々な情報を面的に把握できるようになった。現基準は、計画策定時当時の限られたデータで設定された基準であり、現在の観測技術を踏まえ、基準・指標の意味合いを再認識する必要がある。
- (13) 新たな土砂管理基準案では、単年ではなく時系列、平均的な評価を検討してきた。ただし、単年での大きなインパクトに対する評価も重要である。

2. 課題解決に向けた検討について

- (14) 計画策定時に残された課題について、個々の領域における実態の解明だけではなく、総合土砂管理視点からは、その結果を流砂系一貫のシミュレーションへの反映していく必要がある。現時点では、どの事項がシミュレーションに反映できて、今後どのような方針で課題解決した結果を計画にフィードバックさせていくかを検討していくことが必要である。
- (15) 砂防施設の土砂動態について、H23～H25以降の年は、「土砂流出が少ない時」ではなく「平時」の状態である。
- (16) 河川からの河口通過土砂量は一旦河口テラスにストックされるので、海岸への土砂供給とのタイミングにズレが生じる。河川から海岸への土砂供給を評価するうえで、河口テラスのボリューム等を用いて土砂管理指標が設定できないか。
- (17) 砂防堰堤の影響について、大規模時には土砂流出を抑制し、平時には通過させているため砂防施設の機能は発揮されていると確認できる。砂防施設の効果を総合土砂管理的な視点でこの効果をどう評価するかが重要である。例えば砂防堰堤は比較的大きなイベントに対して効果を発揮する設備であり、トレンドだけでなく単年での評価も必要である。
- (18) 河口テラス付近の土砂量を算出する際には、T.P.+0m以下の土砂量で整理しているが、T.P.+0m以上の水面より上に堆積している土砂も、土砂供給のポテンシャルを有しているため、整理した方がよい。
- (19) 溪岸崩壊を考慮したシミュレーションでは、「土砂収支に大きな影響がない」と評価しているが、「溪岸崩壊が発生したとしても適切に土砂を管理することで土砂動態に大きな影響を与えない」という表現が良いのではないか。

3. 今後の予定について

- (20) 第2回フォローアップ委員会では、総合土砂管理計画に対する砂防施設の効果の意味合いや、河口テラスにおける土砂管理指標・基準の考え方についても議論していただく。
- (21) 安部川から静岡清水海岸へ、国と県が連携して養浜材料を融通する取り組みをしてきており頑張っている。しかしながら、河道掘削を実施しても流出土砂量が20万 m³/年以上であれば汀線は安定傾向となることを確認と記載があるが、今回の評価では26万 m³/年程度が必要であると評価しているため、引き続き検討が必要である。

以上